

# 2020年農林業センサス速報値

## ～個人農業経営体は減少 法人数増加・規模拡大の傾向強まる

農水省大臣官房統計部は11月27日に令和2年2月1日現在の2020年版農林業センサスの速報値結果を発表した。農林業経営体数の調査結果では109万2千経営体となり、5年前の2015年調査結果と比較して31万2千経営体の減少となった。農業と林業を分けると、農業経営体では107万6千経営体で前回調査よりも1万6千経営体の減（比率では△21.9%）、林業では3万4千経営体となり、前回調査よりも5万3千経営体の減（比率では△61.2%減）となった。林業分野における減少率は顕著な落ち込み幅となっている。これが、10年前と比較すると図の通り更なる減少率となっている。10年前の平成22年の農林業経営体は172万7千経営体（うち農業経営体数は167万9千経営体、林業経営体は14万経営体）あったので10年前と比較すると実に農業経営体では60万3千経営体の減にて△36%減、林業経営体では10万6千経営体の減にて△75.7%減となっている。国土の約66%を占める森林面積（総森林面積約2,510万ha、うち天然林約1,300万ha 人工林約1,000万ha その他竹林等）なのだがこれだけ林業経営体が減少しているにも拘わらず、意外にも森林面積はここ10年の間ほぼ横ばいで推移しているようだ。どのような仕組みで維持管理出来ているのであろうか興味のあるところだ。

さて、農業経営体数のうち、個人と団体の経営体数に変化が出ています。図の通り個人の経営体は減少しているのだが、団体経営体は僅かながら増加傾向にある。団体経営体のうち法人経営体は3万1千経営体となっており、平成27年と比べて4千経営体増加、10年前の平成22年と比べて9千経営体が増加している。経営耕地面積規模別の農業経営体数で見てみると、1農業経営体当たりの経営耕地面積も増加傾向にあり全国ベースでは5年前の比較で0.6ha増加、北

《2020 農林業センサス》

農林業経営体数(全国)

単位:千経営体

	農林業経営体	農業経営体	林業経営体
平成22年	1,727	1,679	140
平成27年	1,404	1,377	87
令和2年	1,092	1,076	34

農林業経営体数(全国)

単位:千経営体

	農業経営体	個人経営体	団体経営体	
			法人経営体	その他
平成22年	1,679	1,644	36	22
平成27年	1,377	1,340	37	27
令和2年	1,076	1,037	38	31

1農業経営体当たりの経営耕地面積

単位:ha

	全国	北海道	都府県
平成22年	2.2	23.5	1.6
平成27年	2.5	26.5	1.8
令和2年	3.1	30.6	2.2

海道では4.1ha増加、都府県では0.4ha増加、10年前と比較して北海道では7.1ha増加、都府県では0.7ha増加している。耕地面積の集積割合で見た場合、10ha以上を持つ経営体が全体の55%以上となっており5年前と比較しても更に経営面積の大規模化が進んでいるようだ。これに比例して3千万円以上の農産物販売金額を売り上げる層も増加している。全国の平均経営耕地面積では3.1haだが、うち1.2ha分は借用地となっておりその分経営負担はかかっているはずなのだが、地代負担を上回る経営が成立しているという見方も出来ようか。販売における売上で部門別の経営体数で見ると、果樹類・施設野菜が増加傾向、稲作では減少傾向が続き露地野菜は横ばいとなった。水稻ではここ5年米価が上昇していたにも拘わらず売上が減少しているという事は耕作面積の減少が大きいため1俵販売単価ではカバーしきれない状況が伺える。果樹は実として収穫するまで時間がかかる作物なので一時期は木を植える面積よりも木を切って離農する面積の方が大きくなるのではないかと懸念されていたが、

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

どうもそうではないようだ。生産者が売り渡す農産物の販売先については群を抜いて農協が6割以上占めているものの減少傾向にあるのは変わらないが、農協以外の販売先に販路を求める傾向は僅かであるが増加している。最後に、個人の年齢別基幹的農業従事者数の構成比では、5年前と比較して65歳以上が19万1千人増加している。新規就農支援事業もあってか50歳以下クラスは8千人増加しているが、次の担い手責任者世代クラスである50～64歳以下は減少しているのが気がかりだ。日本の人口の65歳以上の年齢別比率は25%となっているが、農業分野における年齢別構成比で65歳以上の個人経営体における従事者は94万9千人と全体の個人経営体従事者の約70%と歪な構造となっている。近年人生100年とは言うものの、農業機械の進歩が進んでもあと15年も経たないうちにこの世代は概ねリタイアすると考えるのは必然であろう。この15年で日本農業は大きく変わるの間違いない。世界の人口が増大する中で日本の人口は減少、また食の多様化に伴い主食である水稲は生産調整や転作を生産者で協力し合わない限り米価の値崩れとともに高齢化が進む水稲耕作者は一気に生産意欲を失い大量廃業する恐れも懸念される。小麦や大豆や砂糖は生産コストの面からほぼ輸入で賄っている農産物もあるが、世界から今まで通り安定的に食糧確保が出来るのであろうか。日本は国内農業の生末を真剣に議論し国は方針を明確に示す時はもう来ているはずだ。

## 新年を祝う和菓子『花びら餅』

皆さん『花びら餅』という和菓子はご存じでしょうか？菱形のピンク色の薄い餅、白味噌餡、甘く煮たゴボウを白い求肥で半円型に包んだもので、正月に食べられ、別名「菱葩餅（ひしはなびらもち）」とも言います。白餅の上に菱形の餅を置き、その上に大根や猪、押し鮎（＝古来、新年の祝いに用いていた塩漬けにした鮎）などをのせて食べ、長寿を願ったそうです。それが次第に簡略化し、押し鮎や味噌を餅で包んだ「宮中雑煮」と呼ばれる物が食べられるようになります。さらに簡略化し、押し鮎がゴボウに代わり、雑煮が餅と白味噌で表されるようになりました。そして、それがお菓子として宮中で食べられるようになります。明治時代に入り茶道裏千家が初釜（＝年初めの茶事）のお菓子として出すことを許され、正月のお菓子として親しまれるようになりこれまで長く京都で食べられてきましたが、近年は他の地域にも広まっています。和菓子にゴボウ、一見ミスマッチな感じはしますが、押し鮎に見立てておかれたもので、土の中にしっかり根を張るので「家の基礎がしっかりしている」ことや「長寿」を願う意味が込められています。おせちのお煮しめなどにも使われている縁起のいい根菜です。甘煮にしてみそ餡に合わせると、とっても相性が良いそうです。



意外と知られていない『花びら餅』ですが、知れば知るほどその縁起の良さや歴史の深さに驚かされます。平安時代から伝わると言われるとなんだか趣深い気持ちにもなり、見た目も可愛い和菓子なので、食卓が彩り豊かになります。年末になると品切れ続出する和菓子なので、なるべく早めに手に入れておくのがおすすめ。予約ができるお店なら、事前のご予約がおすすめです。

新型コロナウイルス感染が治まらない中、ご家庭で過ごす時間が増えていると思います。そんな時こそ昔からの伝統・風習を楽しむゆとりが必要かなとも思います。是非お試しください。(福岡支店)

### 【年末年始休業日のご案内】

当社は12/29より1/3まで休業させていただきます。12/28は年休消化奨励日につき担当者不在の場合もありますのでご了承ください。

本年も当紙をご愛読下さいまして有難うございました。今年は緊急事態宣言など、今までにない働き方や生活スタイルを経験し新たな価値観を見出す年となりました。来年は平穏な年になります様心よりお祈り申し上げます。静かなお正月になりそうですが、皆様どうぞ良いお年をお迎えください。

編集集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>